



Design

～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

発行元：地域包括ケア病棟“彩り”・リハビリ科・地域医療連携室

地域包括ケア病棟広報誌Design号外12号です。表面は、“彩り”で受け入れた事例と老健やましろからのお知らせです。裏面は、地域の皆様からのご要望・ご意見の報告②と3月22日（金）に実施した認知症疾患医療連携協議会の報告です。

（地域医療連携室 室長 南出 弦）

地域包括ケア病棟“彩り”で受け入れた事例の紹介（第31回）

～在宅での生活をイメージしてもらう～

在宅のケアマネジャーから依頼があり、他病院に入院中の急性期治療終了後の患者様を受け入れました。受け入れた目的は、自宅退院に向けた、①ADLのUP、②環境整備、です。受け入れに際し、退院支援室の山本Nsと共に入院中の医療機関に出向き、患者さんのリハビリ見学などの他、ご家族と在宅のケアマネジャーを交えて意向の確認をさせて頂きました。

現在、患者さんは“彩り”に入院中ですが、患者さんとご家族が望まれる生活の実現のため、医師、病棟Ns、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカーが一丸となり取り組んでいます。“彩り”退院後の在宅での生活をイメージして頂けるよう、近く、ご家族とケアマネジャーにリハビリを見学してもらう予定です。（地域医療連携室 室長 南出 弦）

老健やましろからのお知らせ

～令和の時代の幕開けに～



先日、新元号「令和」が発表されました。いよいよ5月からは「令和」の時代の幕開けです。老健やましろも、病院からの職員の異動や職員の交流も始まり、新たな風が吹きそうな予感です。

現在、老健やましろには約95名の入所者が在宅復帰を目指しリハビリをしながら施設生活を送られています。そのような方々の気分転換を図るため、春は桜、6月にはあじさい、秋はコスモスの見学を計画しています。今年、桜見学に行くフロアでは3月中旬より桜前線のニュースに耳を傾け、見学に行く桜の開花状況を確認したり、見学時期をいつにするのかとヤキモキしていました。そして桜見学の当日は、日差しはあるものの風が強く花冷えする日でしたが、満開の桜、土手の土筆や満開のネコヤナギの花を見て「きれいやわ」「来てよかった」という利用者さんの声がきかれ、春の訪れを肌で感じていただけたのではと思います。このように外部への見学やレクリエーションを工夫し、単調になりがちな施設生活に彩を添え、体も心も元気になっていただけるようこれからも取り組んでいきたいと思ひます。

（介護老人保健施設やましろ 副施設長兼事務長 大溝 明実）

地域の皆様から頂戴したご意見・ご要望について その②

号外11号に引き続き、地域のケアマネジャーの皆様や訪問看護ステーションの皆様のところへ訪問させて頂いた際、頂戴したご意見・ご要望（一部）と改善策をお知らせします。

*

嚥下機能評価目的入院で、患者さんが食べたいと思うものをどうすれば食べることができるか、一緒に考えて欲しい。

日々の生活の中で、食事は楽しみのひとつでもあります。どのようなご希望で検査を受けられるのかなどを確認するため、入院前にご記入頂く質問用紙の作成を検討しています。検査結果に基づき、できるだけご希望が叶うよう、最善の方法を一緒に考えてまいります。これからも、検査を受けてよかったと思って頂ける入院となるよう努めていきます。（言語聴覚士 草野 由紀）

平成30年度第2回 認知症疾患医療連携協議会の報告

～いざという時のために～

3月22日（金）、当地区の認知症患者の治療・支援機関関係者が一堂に会して、認知症疾患医療連携協議会を開催しました。

まず、当院脳神経内科大島洋一部長による「認知機能検査の目的と種類について」と題したミニレクチャーがありました。脳の病変部位によって認知症のタイプや症状が異なることや、代表的な認知機能検査の紹介と実際について、画像を交えて分かりやすく教えて頂きました。続いて、「高齢者虐待」をテーマに、事例紹介と意見交換を行いました。事例紹介では、地域医療連携室南出精神保健福祉士より、病院・行政・福祉が一体となって虐待の発見から認定・保護に至った例を紹介しました。その後の意見交換では、「虐待認定は早めに行い、措置として対応するか、サービスとして対応するか、関係者と連携しながら進める」（参加行政）、「どこからが虐待か判断に迷う」（在宅支援者）、「院内で加害が再発する不安や恐怖感がある」（看護師）、「困った時は警察に相談してもらって構わない」（木津署生活安全課）など、予想以上に闊達な意見がでました。結論の出づらい課題ですが、日頃からネガティブな話題を共有することで、いざという時に連携できると感じました。（地域医療連携室 臨床心理士 谷川 誠司）

地域医療連携室より

～ Free As A Bird ～

既存の会議を1つに統合し、新たに“地域包括ケア会議”を立ち上げました。メンバーは、岩本副院長兼老健施設長、大島脳神経内科部長、地域包括ケア病棟“彩り”の看護師、退院支援室の看護師、リハビリ科のセラピスト、訪問看護部門の看護師、地域医療連携室のソーシャルワーカー、老健やましろの職員です。このチーム会議の特徴は、①各部署から比較的若手職員がメンバーになっていること、②日頃の現場で困っていることや改善したいことを積極的に話し合うこと、③地域課題について話し合うこと、です。既存の概念にとらわれることなく、自由な新しい発想で、この会議が発展していければと思っています。（地域医療連携室 室長 南出 弦）